

第61号

2016年3月31日

©

# 南島文化研究所報

沖縄国際大学南島文化研究所  
〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾二丁目6番1号

所長 田名真之  
電話 098-893-7967

## 多良間島雑感

田名真之  
(南島文化研究所所長)

2月中旬、機会を得て初めて多良間島に足を運んだ。家譜記録やその他古文書が新たに見つかったというので、その確認調査に行くメンバーに加えてもらったのである。

多良間島は東西5.8km、南北4.4kmのハート型をした島で、面積は19.75km<sup>2</sup>である。フクギに覆われた島で、多くの御嶽があり、その年中行事、伝統祭祀が息づく島である。

ところで多良間島には、「多良間島塩川村丑年惣頭(そうず)帳」「多良間島仲筋村子年惣頭帳」という文書がある。「惣(総)頭」とは頭数で人口調査の史料である。王国時代の沖縄では、1630年代から薩摩藩の命令で、「キリシタン宗門改」が行われ、5～10年ごとに薩摩への報告が義務づけられていた。村単位で、地域内の人々の宗旨を調査報告した。キリシタンがいないことを確認する作業であったが、王国では毎年の人口調査へと繋がっていった。その帳簿の残存するオリジナルの史料が、多良間島の「丑年、子年惣頭帳」であり、多良間島の村人の生死を記した貴重な史料となっている。

多良間島には、他にも古琉球から近世初期にかけての王府の辞令書が数点も残されており、家譜や家文書など近世文書が比較的多く残存している。宮古島では文書の残存状況が芳しくないのも、その差異は奈辺にあったのか、気にかかるところである。

以前、縁あって『多良間村史』の資料編で、文書1点の翻刻と解説を担当した。1859

年、岩手県南部藩宮古の商船善宝丸が多良間島に漂着した際に、島民が手厚く保護し、那覇経由で乗員7人を無事故郷に送還した、そのため、南部藩の藩主からお礼の金品贈られた、との記録である。

今回、「多良間島ふるさと民俗学習館」の玄関先に小型の漁船が設置されているのが目にとまった。この漁船は、東日本大震災で流され、約4年かけて多良間島にたどり着いたのだが、調べてみたら宮城県南三陸町の漁船であったことから、これも何かの縁だろうと所有者の了解のもと、多良間村で保管することになったという。

島の人口は、最盛期(大正末～昭和20年代の3800人台)の三分の一の1270人余りとなっており、多くの離島同様に人口減少が続いている。特効薬はないが、紅花を使ってのお茶や染など、新たな地場産業育成の試みなど、熱心に取り組みされており、そうした動きに期待したい。



多良間島のフクギ並木

## 2015年度人事

所 長：田名真之（総合文化学部教授）

副所長：崎浜 靖（経済学部教授）

（任期：2015年4月1日～2016年3月31日）

## 2015年度新規所員

（任期：2015年4月1日～2017年3月31日）

桃原千英子 総合文化学部日本文化学科 講師  
及川 高 総合文化学部社会文化学科 講師  
比嘉 理麻 総合文化学部社会文化学科 講師  
宮城 弘樹 総合文化学部社会文化学科 講師

## 2015年度新規特別研究員

（任期：2015年4月1日～2017年3月31日）

柳下 換 横浜市立大学非常勤講師  
稲福みき子 沖縄国際大学名誉教授  
宮城 邦治 沖縄国際大学名誉教授  
家中 茂 鳥取大学地域学部准教授  
平井芽阿里 日本学術振興会特別研究員（PD）  
江上 幹幸 元沖縄国際大学総合文化学部教授  
伊野波優美 日本文学協会会員  
仲本 陽兵 沖縄県立那覇商業高等学校  
金城 満 沖縄県立浦添工業高等学校教諭  
細川 徹 東北大学大学院教育学研究科・人間発達臨床科学講座・発達障害学分野教授  
金城 達也 北海道大学大学院文学研究科博士後期過程在学中  
山本 正昭 沖縄県立埋蔵文化財センター  
秋山 道宏 沖縄国際大学非常勤講師  
高江洲昌哉 神奈川大学非常勤講師  
阿利よし乃 沖縄国際大学非常勤講師  
具志堅邦子 沖縄国際大学非常勤講師  
佐久川志麻 北谷町公文書館  
島袋 幸司 豊見城市教育委員会生涯学習部文化課  
城間 義勝 北中城村教育委員会生涯学習課

高嶺 亨 本部町立本部中学校  
玉城 夕貴 北中城村教育委員会生涯学習課  
ブードロウ山本 成 沖縄国際大学非常勤講師  
三上 智恵 沖縄国際大学非常勤講師

## 2015年度会議及び議題

### 第1回所員会議

日時：2015年4月27日（月）午後4:20～6:00

場所：13号館1階会議室

#### 報告事項

1. 2015年度執行体制について
2. 2014年度事業報告について
3. 2014年度予算執行状況について
4. 2015年度事業計画について
5. 2015年度行事予定について
6. 2015年度事業費予算について

#### 審議事項

1. 2015年度新規所員の選任について
2. 2015年度所員の更新について

### 第2回所員会議

日時：2015年12月11日（金）午後4:20～5:25

場所：13号館1階会議室

#### 報告事項

1. シマ研究会について
2. 第38回南島文化地域学習について
3. 南島研セミナーについて
4. 第37回南島文化市民講座について
5. 2015年度韓・中・日協定研究所学術大会について
6. 喜界島調査について
7. 台湾・福建調査について
8. 韓国調査について
9. 旧南洋群島調査について
10. 第20回窪徳忠琉中関係研究奨励賞について
11. 第1回喜界島調査報告会について
12. 今年度発行の印刷物について
13. 事業費予算執行状況について

## 審議事項

1. 2016年度 新規特別研究員の選定について
2. 2016年度 事業計画（案）について
3. 2016年度 事業費予算（案）について
4. 所長選挙の実施について

## 第3回所員会議

日時：2016年2月10日（水）午後4時～4時50分

場所：13号館1階会議室

## 報告事項

1. 所長選挙の結果について
2. シマ研究会について
3. 第20回窪徳忠琉中関係研究奨励賞について
4. 第1回喜界島調査報告講演会について
5. 福建調査について
6. 予算執行状況について

## 審議事項

1. 副所長の選任について
2. 事業計画委員の選任について
3. 特別研究員の更新について

## 2015年度事業報告

## シマ研究会

## 第192回シマ研究会

日時：2015年5月18日（月）

午後4時20分～6時15分

場所：13号館301教室

テーマ：「辺境の地（大神島、狩俣、島尻）」

映画上映および解説

講師：仲原弘哲氏（南島研特別研究員・  
今帰仁村歴史文化センター館長）

コメンテーター：石垣直 所員（本学総合文化学部准教授）

司会：崎浜靖副所長（本学経済学部教授）

参加者：40人



講師の仲原弘哲氏

## 第193回シマ研究会

日時：2015年7月20日（月）

午後4時20分～5時50分

場所：13号館1階会議室

テーマ：「共通語、方言、ウチナーグチ」

講師：野原三義氏（南島文化研究所特別研究員／沖縄国際大学名誉教授）

コメンテーター：中本謙氏（南島文化研究所特別研究員／琉球大学教育学部教授）

司会：西岡敏 所員

参加者：33人



講師の野原三義氏

**第194回シマ研究会**

日 時：2015年12月21日（月）

午後4時20分～5時50分

テーマ：「明治中～後期の沖縄県における海外  
移民送出地域の成立に関する一考察」

場 所：13号館1階会議室

講 師：花木宏直氏（琉球大学教育学部講師）

コメンテーター：石川友紀氏（南島文化研究所特別研  
究員・琉球大学名誉教授）

司 会：小川護所員

参加者：29人



講師の花木宏直氏

**第195回シマ研究会**

日 時：2016年2月5日（金）

午後4時20分～6時40分

場 所：13号館1階会議室

テーマ：「沖縄文化のレジリエンス（復元力）  
－地域史と景観復原の視点から」

講 師：

恩河尚氏（沖縄国際大学非常勤講師・  
沖縄市総務部総務課市史編集担当嘱託）

「地域史編集とまちづくり

－沖縄市史編さんの取り組みから」

呉屋義勝氏（南島文化研究所特別研究員・  
元宜野湾市教育委員会文化課課長）

「文化財保護行政の取り組みと課題

－普天間飛行場の跡地利用計画の策定  
に向け－」

コメンテーター：山崎孝史（南島文化研究所特別研究員・  
大阪市立大学教授）

司 会：崎浜靖副所長（本学経済学部教授）

共 催：科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）

「軍事的圧力に抗う文化的実践－沖縄とパ  
レスチナにおける地誌編纂と景観復原」

（研究代表者 山崎孝史大阪市立大学教授）

沖縄地理学会

参加者：29人



講師の恩河直氏



講師の呉屋義勝氏





**第38回南島文化地域学習**

日時：2015年6月20日（土）～21日（日）

場所：渡名喜島

参加者総数：29人

講師：田名真之所長、崎浜靖副所長、上原静所員、  
小川護所員、仲田栄二氏(特別研究員)、  
杉本信夫氏(特別研究員)、桃原又一氏

講師と参加者の皆さん

**第37回南島文化市民講座**

日時：2015年11月7日(土) 午後2時～5時

場所：沖縄国際大学13号館301教室

(同時に308教室にてライブ中継)

テーマ：今、戦争遺跡を考える

発表者・タイトル：

- ①吉浜 忍（南島文化研究所所員・沖縄国際大学総合文化学部教授）  
「戦争遺跡の保存・活用の歩み」
- ②山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）  
「戦争遺跡からみた沖縄の近代」
- ③瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）  
「戦争遺跡からみた沖縄戦」
- ④上地克哉（読谷村教育委員会）  
「戦争遺跡の文化財指定と活用」
- ⑤村上有慶（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）  
「全国の戦争遺跡の動向と平和活用の意義」

コーディネーター：

宮城弘樹（南島文化研究所所員・沖縄国際大学総合文化学部講師）

共 催：沖縄タイムス社

参加者：144人



パネリスト一同

**協定校間学術交流講演会**

日時：2015年12月7日(月) 午後1時～5時

場所：本館6階会議室

テーマ：食をめぐる感性

参加機関：湖南学研究院（全南大学校）

中琉関係研究所（福建師範大学）

南島文化研究所（沖縄国際大学）

発表者：

- 比嘉理麻（南島文化研究所所員/  
沖縄国際大学総合文化学部講師）  
「ブタからの問い－沖縄における人－ブタの関係史」
- 萩原左人（南島文化研究所特別研究員  
琉球大学法文学部教授）  
「沖縄の肉正月について」
- 謝必震（福建師範大学中琉関係研究所 所長・教授）  
「中琉航海飲食述論」
- 徐斌（福建師範大学中琉関係研究所 副研究員）  
「福建地方の飲食禁忌について」
- 崔裕峻（チェ・ユジュン）（全南大学校湖南学研究院 感性人文學研究團 HK教授）  
「食口無き時代の食事－脱産業社会の大衆文化における食べる行為の表象について－」

〔自由論題〕

李榮眞 (イ・ヨンジン)

(全南大学校湖南学研究院人文韓国研究教授)

「ホタルと水漬く屍

(Firefly and the Drowned) 」

通訳：

(韓国語) 真島知秀、岸本孝根

(中国語) 陳碩炫

参加者：161人



発表者

第1回 喜界島調査報告講演会

日時：2016年3月13日 (日) 午後6時～8時

講師：及川高 所員

タイトル：「近世奄美における〈肥料〉

文化への視点 - 南島農耕民俗史の解明に向けて -」

場所：喜界町中央公民館 (旧館ホール)

後援：喜界町教育委員会

参加者：77人



講師の及川高所員

第20回窪徳忠琉中関係研究奨励賞

受賞者：富田千夏氏 (琉球大学附属図書館職員)

審査委員会・運営委員会：2016年2月12日開催

贈呈式・祝賀会：2016年3月11日 (金)

午後6時～8時

場所：本館6階会議室



受賞者と運営委員



参加者とのやりとりも活発に行われた

## 調査研究

### 喜界島調査の参加者とテーマ

- 上原静 所員：  
南西諸島における先史・原史文化の研究
- 崎浜靖副 所長：  
喜界島の歴史地理
- 小川護 所員：  
喜界島における農業構造の研究
- 岩田直子 所員：  
離島地域の社会福祉について
- 山口真也 所員：  
離島における図書館活動－公共図書館の課題解決支援と学校図書館の司書配置状況
- 宮城弘樹 所員：  
喜界島城久遺跡群とグスク文化に関する研究
- 及川高 所員：  
喜界島調査
- 大城博美 研究支援助手：  
喜界島の人々の老いと死について

### 韓国調査の参加者と研究テーマ

- 呉錫畢 所員：  
韓国泰安（テアン）原油流出事故後の対策
- 上原静 所員：  
高麗瓦系瓦の系譜についての研究
- 名城敏 所員：  
韓国（大田、公州、水源）の自然環境
- 宮城弘樹 所員：  
琉球列島における先史・古代の交流史
- 大城博美 研究支援助手：  
韓国における民俗文化の博物館等における展示（表象）について

### 台湾調査の参加者と研究テーマ

- 李イニッド 所員：  
儀礼における方言の使用について－客家語

### 福建調査の参加者と研究テーマ

- 上原 静 所員：  
明朝系瓦の造瓦技術の系譜について
- 田名真之 所長：  
初期の琉中関係史跡の調査

### 旧南洋群島調査の参加者と研究テーマ

- 大城朋子 所員：  
旧南洋群島における言語接触の実態調査
- 田名真之 所長：  
旧南洋群島における県系人施設の調査
- 稲福日出夫 所員：  
旧南洋群島における県系人の沖縄に対する意識の様相の調査
- 兼本敏 所員：  
旧南洋群島における言語接触の実態調査（中国語教育の実態－南下政策について－）
- 岩田直子 所員：  
島嶼圏の社会福祉実践



南洋群島調査参加メンバー



### 訃報

南島文化研究所第2代所長の高宮廣衛先生（本学名誉教授）が2015年8月20日に逝去されました。87歳でした。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



## 地理学と地理教育雑感

小川 護  
(南島文化研究所所員)

筆者は沖国大に地理の教員として勤務して四半世紀近くになる。とりわけ、私が東京の郁文館中学・高校に勤務していた時代、「地理」は地名や特産物を覚えさせられる暗記科目、チリチリ、バラバラの科目であるというイメージがつきまとい、社会科の中でも人気のない科目の一つであった。その後、中学校では、1993(平成5)年度から実施学習指導要領の改訂のなかで、調べ学習を中心とする地理学本来の考え方を中心とした「地理」に衣替えとなった。一方で中学地理は、基本的な地理的知識を体系的に教えることがなくなったため、都道府県あるいは県庁所在地がよくわからない生徒を生み出す結果となってしまった。その反省からか2012(平成24)年から実施の学習指導要領では、地理的な見方、考え方を生かしつつも、体系的な地理的知識についての習得に対する対応にも一定の配慮がみられる。ところが高等学校の場合では、地理A(2単位)あるいは地理B(4単位)が日本史Aまたは日本史Bとの選択であるため、本土の場合、年表によって歴史的知識が整理しやすい日本史の人気があるため、ますます地理離れが進んでいった感がある。

これらのことを背景として、大学の教壇にて共通科目で学生たちに地理学の講義を担当して、地理学とは結局どういう分野の科学なのかと頭をよぎることが時々ある。共通科目のように、一般教養を対象とする分野について教鞭をとることは、専門学科の専門科目とは異なり、別の難しさがある。作家井上ひさし氏の言葉を借りると「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、

まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」ということであろうか<sup>1)</sup>。これを一般学生対象と考えるとなかなかの難題である。

ところで地理学の定義は研究者によっていろいろな考え方があるが、筆者は大辞林第3版<sup>2)</sup>による「人類の生存基盤である地表空間を総合的にとらえ、よりよき環境創造のための具体的で基礎的な知識を提供しようとする学問。地球上に生起する自然・人文(社会・文化)の諸事象の所在・広がり、それらの配置関係・相互作用を調べ、景観や地域の成立および変化過程を解明する。また、ある地域を設定してその特性を描き出す。近年、数学モデル・数値シミュレーションなどの方法を用いて空間認識の理論化も進められている。」という表現が最も的を得ていると思われる。言いかえるならば、地域を構成する諸要素すなわち自然環境、経済活動、文化・伝承そして人間集団等々を地域事象とか地理的事象が地表面(地図)において集中しているかあるいは疎らかといった「分布」という視点が必要となってくる。さらにそれらの地域事象がなぜそこに位置しているのかという理由づけ、いわゆる「立地」条件を追い求めていく地表面のことを扱う科学ということであろう。最近ではネット社会の発展に伴ってGIS(地理情報システム)も急速に一般市民に普及している(カーナビやグーグルマップなど)。そのような環境の中で、学生たちにとって少しでも分かりやすく関心のもてる地理学の授業と考えるこの頃である。

(注)

- 1) 桐原 良光(2001)  
井上ひさし伝、白水社、353P
- 2) 松村 明 編(2006)  
大辞林第三版、三省堂、1349P

### 編集後記

南島文化研究所所長を2期4年にわたってつとめ、研究所活動を牽引してこられた田名真之所長が所長を退任されます。同時に沖縄国際大学を退職し新たな世界へと羽ばたいていかれるということです。さらなる活躍への期待が高まると同時に、やはり寂しさを感じざるを得ません。

今年度より南島研の研究支援助手として採用され、この一年間の事業活動を通して、「学問を地域社会に還元する」ということの大切さを再確認することができました。

新しい所長をむかえ、新年度からもさらに学際的共同研究およびその普及活動にはりきっていきたいと思います。(研究支援助手 大城博美)